

「地域の発展に 貢献する“映画力”」

庄内映画村(株) 副社長 丸山典由喜氏

かつて、映画は大衆娯楽の代表であった。最盛期の昭和30年代前半は、映画館への入場者数が累計で年間10億人を超え(日本映画製作者連盟調べ)、「国民一人が1年間に10回以上映画館へ行く」時代であった。その後、テレビの普及や娯楽の多様化によって、映画は斜陽産業となるが、近年、再び映画の公開本数が増えていることに加え(2011年の邦画公開本数は441本で、2000年から1.6倍の増加。同連盟調べ)、映画館を核としたまちづくりや、「スクリーンツーリズム」と呼ばれる新たな観光スタイルなど、映画を取り巻く環境が変化してきている。

そもそも「映画」とは何なのか。その本質に迫るべく、本シリーズでは各方面から映画に関わる人々に話を聞く。

■行政職員からの転身

ーもともとは行政職員だったとうかがいました。映画に関わるきっかけは何だったのでしょうか。

私が羽黒町(現鶴岡市)で観光行政に携わっていた時、映画『たそがれ清兵衛』(藤沢周平原作、山田洋二監督)のロケが行われました。2002年のことです。当時はフィルムコミッションのような受入機関が庄内にはなかったため、鶴岡市(合併前)が中心となって支援実行委員会を立ち上げ、その事務局を担当しました。同作は羽黒町でのロケも多かったのですが、撮影スタッフのロケハン(ロケ地を探すこと)にも同行しました。

ー庄内映画村の設立と副社長になられた経緯を教えてください。

2004年に行われた『蝉しぐれ』(藤沢周平原作、黒土



1967年鶴岡市生まれ。1992年、旧羽黒町職員採用。1999年から5年間観光行政に携わり、映画『たそがれ清兵衛』などの支援実行委員会事務局を担う。2005年、市町村合併により鶴岡市建設部に配属。翌年、商工観光部観光物産課に配属。2007年、鶴岡市職員を退職し、庄内映画村株式会社の副社長となる。2009年より同社取締役。

三男監督)の撮影では、旧羽黒町に広大なオープンセットが製作されました。セットは普通、撮影が終わると取り壊されるのですが、地元から保存を望む声が多かったので、支援実行委員会に所有権を移譲してもらいました。ただ、組織として維持管理する受け皿が必要だということから、2006年7月に庄内映画村(株)を設立しました。私が副社長として同社に就任したのは翌年です。

ー行政職員からの転身に迷いはなかったですか。

全くなかったと言えようそになります。ただ、映画ロケの支援に関わる中で、それが地域にもたらす経済効果やPR効果が大きいことを実感しました。それで、映画を通じてもっと地域を活性化したいという思いから、転身を決めました。

■継続的な映画ロケが重要

ー鶴岡市の庄内映画村オープンセットでは、これまで多くの映画ロケが行われています。どのような誘致活動を行っているのですか。

誘致活動は特に行っていません。実績を重ねることで、口伝で評判が広まり、おかげさまで多くの撮影申し込みをいただいている状況です。私たちは、ただオープンセットをロケ地として提供するだけでなく、企画のお手伝いから、ロケハン、撮影諸準備など、撮影側の希望に添った協力ができる体制を整えています。「揺りかごから墓場まで」という言葉がありますが、まさにそのような形で映画作りを支援しています。

ー映画ロケが多いと、エキストラを集めるのも大変ではないでしょうか。

エキストラは、ホームページなどで常時募集しています。現在の登録者は2,000人ぐらいです。山形県だけでなく、仙台や秋田にお住まいの方も少なくありません。申込時にメールアドレスも登録してもらっていますので、エキストラが必要な時には、メールで一斉に

庄内映画村が撮影協力を行った映画

作品	監督	主演	公開
★スキヤキ・ウエスタン ジャンゴ	三池 崇史	伊藤 英明	2007年9月
山桜	篠原 哲雄	田中 麗奈	2008年5月
おくりびと	滝田洋二郎	本木 雅弘	2008年9月
★ICHI	曾利 文彦	綾瀬はるか	2008年10月
★山形スクリーム	竹中 直人	成海 璃子	2009年8月
★スノープリンス 禁じられた恋のメロディ	松岡 錠司	森本慎太郎	2009年12月
★座頭市 THE LAST	阪本 順治	香取 慎吾	2010年5月
★必死剣 鳥刺し	平山 秀幸	豊川 悦司	2010年7月
★十三人の刺客	三池 崇史	役所 広司	2010年9月
★デンデラ	天願 大介	浅丘ルリ子	2011年6月

★は、オープンセットで撮影された作品

配信します。それで大体集まります。管理調整を円滑に行うため、エキストラ専門の社員もおります。

ー映画作りを支援する上でのご苦労はありますか。

枚挙にいとまがありません。例えば、予定されていたロケが延期になった場合、それまでの準備がすべて無駄になり、損失を被ることもあります。ただ、相手も事情があるわけですから、決して文句は言いません。そうして信頼関係を築いていけば、また次のロケにつながります。誤解を恐れず言えば、1本の作品で「〇〇のロケ地」と紹介し続けるのは限界があると思います。いつときのお祭り騒ぎで終わってしまう危険性もあります。ですから、私たちは、継続的にロケを支援することで、「映画のロケ地・庄内」を浸透させていくことが重要と考えています。

■滞留時間を長くする工夫

ー2009年からオープンセットの一般公開を始められました。観光客の入り込み状況はいかがですか。

おかげさまで順調です。公開初年は約11万人が訪れました。昨年は東日本大震災で落ち込みましたが、今年は徐々に回復しています。ただ、もっと多くのお客様に訪れてほしいと思います。

ーそのためにどのような工夫をされていますか。

営業担当の社員に知恵を絞ってもらい、さまざまなイベントを行ったり、飲食施設などの充実を図ったりしています。最近では、吉本興業と連携して、年に4回、吉本芸人によるステージショーを行っています。また、ロケが行われているときは、撮影に支障の出ない範囲で見学することもできます。

ーオープンセットに“テーマパーク”としての側面も持たせたいということですか。

それは少し違います。オープンセットはあくまで観光より撮影を重視しています。イベントの1つに、庄内藩殺陣乃会による演武がありますが、それは、お客

様を楽しませると同時に、メンバーに殺陣の演技を上手くなってもらい、エキストラとしてロケに参加してもらう狙いもあります。

ーではなぜ、もっと多くの観光客に来てほしいと思われるのですか。

オープンセットに多くの人が訪れ、イベントやロケ見学などを楽しむことで滞留時間が長くなれば、庄内に宿泊する人が増えます。その経済効果は小さくないと思います。ですから、営業では、より多くのお客様が訪れることと同時に、少しでも長くオープンセットに滞留してもらうためにはどうしたらよいかを常に考えています。

■映画ロケは地域を活性化する

ー映画ロケを支援する立場から、映画の魅力をどのように考えておられますか。

1本の作品が完成するまでに、非常に多くの過程があり、また非常に多くの人々が関わります。その効果は多方面に波及し、地域の活性化につながると思います。映画を利用して地域をPRすることも同様です。先にも言いましたが、映画づくりが地域の発展に貢献する力、いわゆる“映画力”はすごいなと、この仕事を務めながら実感しています。

ー一方で、今の映画に課題があるとすれば何でしょうか。

オリジナル脚本の作品が少なくなっていると思います。リメイク作品や、漫画などを実写化した作品が悪いとはいえませんが、映画の質の向上を考えた場合、オリジナル脚本の作品が減ることは大きな問題です。アカデミー賞に限らず、多くの映画祭には「脚本賞」があります。ですから、私は、脚本家を育成する制度を充実させるべきだと考えています。

ーそのために、庄内映画村として取り組んでいることはありますか。

まちキネ(鶴岡まちなかキネマ)を運営する(株)まちづくり鶴岡などと連携して、「庄内キネマ製作委員会」を立ち上げました。これは、庄内を脚本の題材とし、庄内の俳優が出演し、庄内で撮影を行うという取り組みです。今後は年に2本のペースで映画を製作する予定で、第1作の脚本募集には県内外から46本の応募がありました。これをきっかけに、庄内のみならず、日本全体で映画への意識が高まることを期待しています。

ー最後に、今後の夢を聞かせてください。

オープンセットを中心に、庄内でハリウッド映画を製作してほしいですね。無茶だと思われるかもしれませんが、5年前に、日本映画がアカデミー賞を受賞すると予想できましたか。SMAPの香取慎吾が、映画の撮影で庄内に30日間も滞在すると予想できましたか。5年後には、ハリウッドスターのリチャード・ギアが、庄内の街をぶらぶら歩いているかもしれませんよ。

ー貴重なお話をいただき、ありがとうございました。

(聞き手・構成：フィデア総合研究所・山口泰史)